

人を繋げる「若大将」
新マネージャーの素顔に迫る

「一人一人が集まつた時に新しい価値観や考え方が生まれ、人が繋がることによりもつと強くなっている」そう語るのは、今年から三宅島大学マネージャーに就任した塩野谷卓さんだ。塩野谷さんはさわやかな好青年という印象を受ける。

そんな塩野谷さんがマネージャーに就任することになった経緯は、もともと様々なアートプロジェクトに参加し、全国各地を転々としているうちに三宅島大学のプロジェクトを知り、応募したことがきっかけだ。「二十年に一度噴火を経験する中で、それでも三宅で生きていこうという人々に興味があつた」と、当初のイメージを語つてくれた。

元々山育ちの塩野谷さんは、初めて島を訪れた際に海に囲まれた島の空気感を「怖い」と感じたようだ。苦労話を聞いても、普段は三宅島大学の校舎である御蔵会館に一人で住んでおり、広い空間で一人で過ごす怖さに慣れることに苦労したそうだ。怖さを払拭す

べく塩野谷さんが始めたことはなんとやる性格で、大学の裏庭にあつた大量の空き缶やペットボトルをなんと二日間かけて全て掃除したそうだ。

「何事も人と繋がらないと始まらない」と語る塩野谷さんは毎日島の外回りや、夜に伊豆の中学校で行われるバケツ等に参加して、大学のPRや島の人との関係を広げるべく活動している。今後塩野谷さんがどれほど島に溶け込み、人のつながりを広げていくのだろう。想像もできないが、今よりもたくさんの人と繋がり、今よりもっと面白いことに取り組めるようになつた時、大学の屋根から見える島の景色はきっと格別なものになるはずだ。

(長富将成)

◇ 暮らしと環境 ◇

昨年の十一月以来、七か月ぶり八回目の三宅島である。伊豆避難施設からはじまり、御蔵会館をお借りしてから早二年。拠点としているこの三宅島大

学校舎には何度も訪れているが、今回はどこか新鮮さを帯びていた。

三宅島大学校舎の玄関を入れると白い波紋状の模様や迷路が描かれた大きな窓ガラスに、壁に張り出された百人先生の顔写真、三宅島・アートに関連した冊子が並ぶ小さな図書館。

2013年
(平成25年)
6月21日
金曜日

あしたばん編集部
発行所: 加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第三十五号

廊下には学校らしい釣り部活の部員募集の張り紙かと思えば、リビングにて腰掛がゆつたりとしたソファと観葉植物。誰かのお宅にお邪魔したような場所にしたい、色々な人が集まるることによって、もっと面白いことが起きる」と語ってくれた。大学の屋根がお入りの場所らしく、そこから度々自分の知らない場所を無くす事により、徐々に怖さを無くしていくそうだ。すると決めたら徹底的にやる性格で、大学の裏庭にあつた大量の空き缶やペットボトルをなんと二日間かけて全て掃除したそうだ。

アットホーム感と学び溢れる賑わいを兼ね備えたなんともいえない感覚になりました。これは大学として授業を重ね、阿古全体の景色や海を見渡すのだそうだ。

植物。誰かのお宅にお邪魔したような場所にしたい、色々な人が集まることがあって、もっと面白いことが起きる」と語ってくれた。大学の屋根がお入りの場所らしく、そこから度々自分の知らない場所を無くす事により、徐々に怖さを無くしていくよう

いたそうだ。すると決めたら徹底的にやる性格で、大学の裏庭にあつた大量の空き缶やペットボトルをなんと二日間かけて全て掃除したそうだ。

「何事も人と繋がらないと始まらない」と語る塩野谷さんは毎日島の外回りや、夜に伊豆の中学校で行われるバケツ等に参加して、大学のPRや島の人との関係を広げるべく活動している。今後塩野谷さんがどれほど島に溶け込み、人のつながりを広げていくのだろう。想像もできないが、今よりもたくさんの人と繋がり、今よりもっと面白いことに取り組めるようになつた時、大学の屋根から見える島の景色はきっと格別なものになるはずだ。

変化といえば、校舎近くの鋸ヶ浜港の様子もガラッと変わっていた。まだ工事中らしく中の様子は分からなかつたが、今までの一面的な広い待合所から幾何学的なホール状の建物になつていた。茶色の外壁と黒く高い屋根ばかり威厳を備えた「建造物」であつた。使う人が環境を変えるとともに、建物がかわる事で使い方、利用者の振る舞い、様子を変えていくのだろうか。今年も三宅島大学にとつて進化

これまでの誰もが気軽に入れる「ひろば」から威厳を備えた「建造物」で人々にとつて、どんなものなのだろうか。わたしはわからない。しかし、噴火があるからこそ見ることのできる景色が存在するということはわかる。わたしはまだ、この島を知らない。鳥のさえずりを聞きながら、ゆっくり歩きながら、知つていただきたいと強く想つ。(小笠まゆる)

たつたひとつの生き方

⑧

初めて島を訪れたのが一年生の時だからちょうど三年目になる。それから何度も訪れて、今回でかれこれ十目になる。右も左もわからず、ただだだ圧倒されていた二年生、少しづつ慣れてきて島の景色や人を見る余裕が出てきた三年生、そして四年生になつた今、自分は大学生活の集大成として、卒業制作を三宅島で取り組むことに決めた。背景は色々あるが、一番の理由は大学でのゼミ活動の中で一番長く、深く関わってきたフィールドであるからだ。考え方も背景も違う様々な人との関わりの中でその人たちに魅力を感じ、その人たちの魅力を何か一つのカタチにしたいと強く思った。

今回、島の様々な人たちの中でも自分が取材を行おうと決めたのは島の漁師さんだ。理由は、長年にわたつて島の主要産業であり、島の人々の生活を食の面から支えてきた姿、生き方に非常に魅力を感じたからだ。具体的には、島の漁師さんにインタビューをして、取材で得た「生の声」を伝えるインタビュー集を作ろうと思っている。

島で長年生きてきた漁師さんの経験がギュッと詰まつたインタビュー集だ。たつたひとつつの島でたつたひとつの生活を嘗む人の生きざまが載つて、いるそのインタビュー集を見て、その人が積み重ねてきた年月の尊さを感じてくれるような成果物にしたいと

思つてゐる。また、可能な限り生の声と姿を届けていきたいので、漁に同行させてもらうことで自分の肌で漁師の生活を感じることも考えている。自分の学生生活の集大成、そして自分の三宅島での活動の集大成として精一杯取り組んでいきたい。

(長富将成)



記憶に残る場所

「

」

台風四号が接近しているなか、船は進む。荒波に揺られながら、離れていく東京湾を背に、着岸できるかという不安を抱えていた。三池港に着いた頃

は、島の漁師さんにインタビューをして、取材で得た「生の声」を伝えるインタビュー集を作ろうと思つてゐる。

島で長年生きてきた漁師さんの経験がギュッと詰まつたインタビュー集だ。

たつたひとつつの島でたつたひとつの生活を嘗む人の生きざまが載つて、いるそのインタビュー集を見て、その人が積み重ねてきた年月の尊さを感じてくれるような成果物にしたいと

思つてゐる。また、可能な限り生の声と姿を届けていきたいので、漁に同行させてもらうことで自分の肌で漁師の生活を感じることも考えている。自分の学生生活の集大成、そして自分の三宅島での活動の集大成として精一杯取り組んでいきたい。

この前、岩手県釜石市、陸前高田市に訪れた。記憶に新しい東日本大震災の被災地である。「被災地」という言葉は私にとって初めてだし、どんな場所へ、誰に会いにいけばいいのかさえ分からなかつた。誰もがこの状況で、自分に何ができるかを真剣に考え、悩んでいた。自分は震災と無関係だと考える人はいなかつた。当たり前のことが、当たり前に起きていた。「津波避難所」の看板があちこちに散らばつていて、二年経つた今でも、その被災した街並はそのままであつた。メディアから見た被災地や、東京での大きな被害についても、誰もが知り、揺れの強弱の差はあるが、誰もが経験したこと。ゆえに、「東北」と聞くと少し身構えてしまうような気がする。

一方、三宅島では今でも火山活動が続き、山から白い噴煙が上がつてゐる。四年五ヶ月におよぶ全島避難を余儀なくされた平成十二年の大噴火から十二年の月日が流れた今でも、島のあちこちに災害の傷跡が残つており、火山噴火の凄まじい自然の力を物語つてゐる。しかし、溶岩で真っ黒に染まつた大地も、その隙間から新しい緑が芽生え、徐々に回復していふとも言える。島民の方々の心境はどうか。島に対する郷土愛とたくましい努力を積み重ね、復興を遂げてきたのは確かである。

島である。ほぼ二十年ごとに噴火をくり返し、復興という問題に向き合つて来たこの島は、わたしたちの「これから」を考える上で、色々なことを教えてもらつた。本当に感謝です。

加藤文俊研究室で、何度も訪れていた



(廣野吉隆)

ポスター展開催の告知

慶應義塾大学 加藤文俊研究室による

ポスター展を開催致します。

6月23日(日)午前
三宅島大学本校舎(御蔵会館)

